



大七酒造「ものづくり日本大賞」経済産業大臣賞受賞

2月に当社の超扁平精米技術を利用した伝統的生酛造りの高級酒の開発と海外展開の功績により、太田英晴代社長が「ものづくり日本大賞」経済産業大臣賞に輝きました。

これは日本酒業界では過去最高位の快挙です。この賞は日本のものづくりを継承発展させるため、ものづくりの第一線で活躍する特に優秀な方々を顕彰する制度です。大七では匠の技を大切にする伝統から次々と「福島の名工」「現代の名工」を輩出してきたこと、独自の考えに基づくオリジナリティのある技術を磨いてきたこと、そしてグローバルな視点に立って日本の誇るべき伝統技術で海外展開を進めてきたことが高く評価されました。3月20日から11日間に亘り、国立科学博物館で今回の受賞企業を紹介する「ものづくり展」が開催されました。大七の展示も大勢の見学者で賑わいました。

他にも2月、世界的料理学校であるル・コルドン・ブルーのパリ本校において、MOF(国家最優秀職人章)エリック・プリファール総料理長、飲料部門トップのフランク・ラマージュ氏と当社社長により日本酒とフランス料理のペアリング特別講義を行いました。



【亜細亜大学で特別講義】 亜細亜大学創設者の太田耕造氏は、大七当主である太田家の遠縁にあたるため、過去には同校の75周年記念酒も受託しました。そんなご縁もあり、11月、同校3年生のための「トップ・マネジメント特別講義」で当社社長が講演しました。まだ飲酒経験の少ない学生さんにこそ日本酒の魅力を知ってほしいと、話に自然と熱が入りました。

(大七酒造株式会社 ぶるわーず-醸造家たち-Vol.87 より)



ふくしまの四季を感じて！

福島フィルハーモニックメンバーによるコンサート

日 時	6月9日(土) 14:00 開演
会 場	福島市音楽堂大ホール
料 金	入場無料(入場整理券必要)
出 演	志村寿一(ヴァイオリン・ソリスト) 大竹うらら(第一ヴァイオリン) 高木早紀(第一ヴァイオリン) 中村千鶴(第二ヴァイオリン) 伊藤光敦(第二ヴァイオリン) 田口厚子(ヴィオラ) 河野美紀子(ヴィオラ) 懸田貴嗣(チェロ) 河原田潤(コントラバス) 堀内由紀子(チェンバロ)
曲 目	ヴィヴァルディ作曲「四季」全曲 ほか

小島内内分泌内科クリニック主催のコンサートも今回で7回目を迎えます。

スタートは、当院開院7周年記念の2011年(平成23年)6月。忘れもしない、あの震災からわずか3ヵ月目のことでした。地元福島市出身、あるいは縁のあるアーティストによる演奏による“音楽の力”で、福島に暮らす人々の心の復興を図りたいという想いで開催しました。

毎年1回の開催予定でございましたが、会場が予約できずに断念した年があり、これまで6回の開催です。第1回～第5回は弦楽四重奏、第6回はジャズフルート。そして今回は室内楽をお届けいたします。

福島日仏協会の皆様には、お誘いあわせの上会場においていただき、心にしみわたる演奏で美しい“ふくしまの四季”をお楽しみいただければ幸いです。

小島内内分泌内科クリニック 小島元子(会員)

ミネストローネを作ってみては

最近家庭料理が密かにブームになっている。5月4日の朝日新聞に「春野菜のミネストローネは体と心に優しさを」とフランス料理の専門家のレシピが詳しく掲載された。このミネストローネスープを福島日仏協会料理教室火曜日コース担当講師高橋和美氏（ザ・セレクトン福島料理長）が4月の料理教室で教えました。材料は春の野菜など季節にあうものでよい。高橋講師の材料と手順は次の通り。

材料

1. 完熟トマト 2個(300g)
・ ・ ダイスカットトマト缶でも可
2. キャベツ 100g (2枚)
3. 玉ねぎ 1/2 個
4. ジャガイモ 1 個
5. ベーコン 50g
6. 人参 1/2 本
7. マカロニ 30g
8. チキンコンソメ 適量
9. いんげん 適量
10. 水 150cc
11. 胡椒、ニンニク、オリーブオイル 適量
(以上 3 人分目安)

手順

- 1 野菜、ベーコンをすべてさいの目切りにする。トマトは湯せんして皮を剥き種を取りカットする。ニンニクはみじん切りにする。
- 2 ニンニクをオリーブオイルで炒め、香りが出たところにベーコンを加える。ベーコンの油が出てきたところに残りの野菜を加えて炒める。
- 3 野菜がしんなりしたら水を加え煮たさせる。コンソメ、トマトペースト、塩、胡椒で味を調えていく。
- 4 マカロニを茹で、味を調えたスープに最後に加える。
- 5 カップ盛り付けにあれば彩りでパセリをかける。もしくは「いんげん」をあさく茹で彩りでも季節感があってよい。

(料理教室受講生 石川ヒサ)



辻邦生—パリの隠者展 から

小説家で学習院大学の教授でもあった辻邦生の巡回展が、氏がこよなく愛したパリ、ストラスブールに次いで東京の日仏ギャラリーで平成 29 年 11 月 5 日から 18 日まで開催された。

その折頂いたリーフレットには辻邦生のパリ在住時代の様子があらゆる角度から紹介されていて氏の作品しか知らぬ私などには思わぬプレゼントだった。夫人を含め当時パリに住んでいた森有正や、高校の先輩であり親友であった北杜夫や渡航中同船した加賀乙彦などとの交流の様が、細かい文字でびっしり書かれたハガキなどを通して生々しく伝わってきた。図書館に通って調べた細かい文字で埋めつくされた何冊ものノートとメモ。折につけそこそこに登場する手描きのユーモラスなマンガ。圧巻は氏が持ち歩いていったという手描きのパリの地図。(几帳面にも自分が歩いた道は黄色でマーキングしてある。) パリに憧れ、パリに住みパリで働きたいと願っていた彼がパリ第 10 大学、後にパリ第 3 大学で教授を勤めたのは昭和 50 年代後半のことであった。

もともと前世紀末ジャポニズムが一世を風靡したパリに於いて彼の講ずる「日本文化入門」や「日本文学論〈隠者の文学〉」などはパリの文化人の間に静かに浸透していったに違いない。

その頃、講演などで足繁く日仏の間を往来していた夫妻が住んでいたアパルトマンは、パリ市デカルトマン街 37

番地であるが、その壁画には「辻在住を記念する」石版のプレートがつけられている。彼を通して日本文化を学んだ多くの人々が、辻がパリをこよなく愛したように彼らも〈パリの隠者〉たらんと欲した彼ら夫妻を哀惜し尊敬したこよなく愛した証でもある。

辻邦生との出会いは昭和 40 年代初めの「回廊にて」が最初。一読して日本人離れした硬質な小説を書く人が現れたと驚いたものだ。芸術は孤独との闘いとは想像していたが、「孤独」そのものの苦悩を乾いたヨーロッパの風土を背景にこれほど見事に追求した作品は初めてではないかと思った。それに彫刻を刻むような緻密な文体にも魅了された。以来次々と発表されるごとに読み進めた。中でも忘れられないのは三省堂の広辞林ほどもある「背教者ユリアヌス」や「春の戴冠」などは、夜も昼もなく没頭してむさぼり読んだ懐かしいものである。

今回の巡回展を機に「春の戴冠」を再読した。今回は歴史的な事件や登場人物や寺院、工房などの一応知っていたし、何よりもフィレンツェの街を隅々まで一人で歩きまわって寺院や建物などに直に触れた体験を踏まえて読んだので一層感慨深いものがあつた。ルネッサンス時代の空気や歴史の流れを一枚の壮大なタペストリーの中にみる思いがした。織物の中に散らばる人々、美しいシモネッタやジュリアーノの悲劇、「春」や「ヴィーナス誕生」を生んだボッテチェリなどと再会しつつ一か月かけてこの大作を読了した。

鈴木淑子（会員）

山形大学と仏検-学生が 共に学べる環境づくりを目指して-

合田 陽祐 (山形大学)

仏検は山形大学のフランス語教育に欠かせない重要な柱の一つです。本学では、3名のフランス語専任スタッフと1名の非常勤講師が協力して、一昨年より団体受験に取り組んでいます。そして昨年からは、仏検の受験者と合格者にそれぞれ加点する旨を、全学共通のシラバスに明記しています。クラス内でも仏検受験を盛んに呼びかけた結果、春秋合わせての受験者数が、100名の大台を突破しました。この数字は、全学での1年生のフランス語履修数140名を考慮すると、なかなかのものと言えます。じっさい受験者の大半を占めるのは、初修外国語としてフランス語を学ぶ1年生で、そこには文系だけでなく、理系の学生も含まれています。また肝心の仏検合格率は、2017年度は全体で8割5分以上と高い水準にあります。

初修外国語の1年生クラスの場合

おもに1年生を対象に週2回行う、基盤教育の授業で教えられることは限られています。そのカバーをしてくれるのが仏検です。年2回の仏検受験に学生が自主的に取り組めば、語彙力や聴解力の大幅なアップにつながります。また、資格の取得という具体的な目標をもって勉強できるのも、仏検の大きな魅力です。1年生のクラスでは、春季試験での5級、秋季試験での4級の取得を目指して取り組みます。

山形大学のフランス語教育では、学生が一つの課題に協力して取り組めるような環境づくりを大切にしています。たとえば定期試験では、筆記にくわえて、必ず会話のテストも課していますが、会話のダイアログは、ペアで練習することを推奨しています。昼休みの教室からは、会話練習をするグループの笑い声がしばしば聞こえてきます。なかには家に帰ってから、スマホを使ってペアで練習しているという学生もいました。語学の学習は孤独だとしばしば言われますが、やり方次第では、集団で楽しく学ぶこともできるわけです。仏検対策も同様で、団体で受験する学生たちは、休憩時間に問題の出し合いをして、互いに協力しながら試験対策を行っています。

また仏検の時期が近づくと、1年生を対象に「仏検直前対策講座」が開かれます。講座は2週に分けて開講され、講師は専任教員が交替で務めます。仏検の試験には、まだ授業では習っていない箇所が含まれます。その部分を補い、合格率を少しでも上げるのがこの講座の目的です。受講は自由ですが、毎年約50名の1年生が、この講座に積極的に参加してくれています。

フランス語のイベント

山形大学では、同じ初修外国語の中国語やドイツ語と比べると、フランス語の履修者はさほど多くはありません。また本学は県内各地にキャンパスが分散していますが、1年生は全学部が一つのキャンパスに集まり、語学の授業を受講します。

これらの条件をいかして、学部や学年の壁を越えて参加できるイベントを、一昨年から企画しています。「パリ祭 in 山形大」とクリスマス会です。さらに昨年からは、フランス語暗唱コンクールも開催するようになりました。

7月14日のフランス建国記念日には、同僚の柿並良佑先生の弾きギターに合わせて、パリ祭に因んだシャンソンを大合唱した

り、フランス語でビンゴゲームを行ったりします。古典的なシャンソンの歌唱は、文章と発音を一致させ、正しいフランス語のリズムを身に付けるのに適していますし、初学者がフランス語の数字を正確に聞き取るのは容易なことではありません。ですので、ビンゴといえどもみな必死です。

暗唱コンクールでは、フランスの詩や評論文の暗唱に取り組んでもらっています。個人部門のほかに団体部門も設けて、ペアで練習しやすいようにしています。昨年は21名の学生が参加し、朝日出版社、駿河台出版社、白水社各社の協賛を得て、盛会のうちにコンクールを終えることができました。コンクールには留学帰りの4年生も参加してくれ、1年生はその4年生の発音を聞き、流暢さに驚いていました。いずれは何名かの学生に、学外のフランス語コンクールや弁論大会にも挑戦して欲しいと考えています。



暗唱コンクールの団体部門で優勝

2・3年生のフランス語専門クラスの場合

本学でフランス語を主専攻として学ぶ学生は、人文社会科学部のグローバル・スタディーズコースを中心に、一学年に5名ほどいます。そのほとんどがフランス語圏への留学希望者です。交換留学先には、ケベックのモントリオール大学(4名)とフランスのアンジェ大学(2名)があります。そして今年度より新たに、パリ・ナンテール大学(2名)との交換留学制度がスタートします。これを機に、フランス語圏からの留学生との交流がますます活発になっていくはずで

仏検に関しては、専門教育が始まる2年次春から、留学開始の3年次夏までに、準2級が取得できるよう呼びかけていますが、最近では、1年生からフランス語を始めて、2年生までに2級を取得する強者もいます(2016年度の実績は、3級が2名、準2級が1名、2級が1名合格。2017年度は、3級が2名、準2級が2名、2級が2名合格)。

留学希望者は、ネイティブ講師による会話作文の授業のほかに、1年生の後期から、「留学事前学習」という授業を履修します。この週に1度の授業では、DELFIの試験対策を行っています。学年別に2クラスが開講されており、留学開始までにB1の取得を目指しています。最近では語学留学にくわえて、学部専門留学に挑戦する学生が増えてきました。英語でも容易に真似できないことに、フランス語を用いて果敢にチャレンジする姿を見て、とても誇らしいとともに頼もしく感じています。

新たな言語への取り組みは、未知なる世界と自己を発見するための旅のようなものです。そしてその旅の過程を目に見える形にしてくれる仏検は、しばしば単位の取得のみで終わってしまうフランス語の学習に、明確な目的意識を与えてくれます。今後も、一人でも多くのフランス語履修者が、自信をもって「仏検〇級取得」と書類に書けるよう、またそれぞれの旅がより素晴らしいものとなるよう、しっかりサポートしていきます。

最後になりますが、サークルやバイト、忙しい授業の合間を縫って仏検の勉強をし、試験日はバスで1時間かけて仙台会場まで赴いてくれる学生たちに、心から感謝したいと思います。

※公益財団法人フランス語教育振興協会 APEF 通信より掲載
合田陽祐先生の了解も得ています。

フランスで育ったバレエ ～舞台芸術にふれる至福のひととき

京都バレエ専門学校 有馬えり子

京都日仏協会総会講演の風景 2017.6.21

会員の有馬先生はバレエの歴史について語られた。それによると、バレエは、パリのオペラ座を中心にその位置を獲得したのだが、イタリア発祥の「バロ」、つまり「バロック・ダンス」がフランスで花開くことになったのだという。それは 17 世紀、フランス国王ルイ 14 世がバレエ好きだったことに由来する。社交上、国王に近づくための手段として、バレエが盛んになった理由も付随するのだ。つまり「夜のバレエ」が原点となるわけだ。また、付随的には、バレエは健康上の意味でも、ある種の肥満防止策になったに違いない。そしてパリのオペラ座には、バレエ学校の前身が設立され、男女の職業としてのバレエの位置が確立されることとなる。

その後、ドイツ・ロマン主義の影響もあり、理性的な形式と感受性が溶け合うことによって、「ロマンティック・バレエ」が生まれるのである。例として、バレエ「ジゼル」が挙げられたが、「ジゼル」には「魔女」や「妖精」が登場する物語だから、当然、幻想的な表現を伴うのである。身体が弱かったジゼルの死後の物語であって、「身分違いの恋」と「この世のものではないもの」がそこでは表現される。そのジゼルでは、コスチュームも長めであり、「トゥ・シューズ」も登場するのだが、「トゥ・シューズ」を使用した「つま先立ち」は、「この世のものではない」ことの表現なのだという。

オルセー美術館所蔵の絵画「ドガの踊り子」に見られるように、画中の観客は男性であり、良家の子女にとっては、たしなみとして、また画中の後方に座す踊り子たちに見られるように、パトロンを見つけるための場ともなったのだが、俗化の原因となったと説明されることもあるようだ。

そののち、フランスでのロマンティック・バレエが徐々に衰退するとともに、バレエ文化はロシア・サンクトペテルブルクへ移ることとなり、ロシア皇帝・ピョートル大帝の庇護の下、ロシア・バレエが興隆するに至る。ロシアでは、「ドンキホーテ」に見られるように、コザックダンス的なアクロバティックな技と同時に、チャイコフスキーの三大バレエ「白鳥の湖」「眠れる森の美女」そして、「くるみ割り人形」が登場するのだ。いわゆるクラシック・バレエ全盛期となる。姿勢、容姿を美しく見せるためにも、スカートも短くされ、それとともにロシア・バレエの派手な技術が世間ではより注目されることとなり、ロシアの「クラ

シック・バレエ」として確立された。そして現在につながる。

そのようなバレエの歴史とともに、20 世紀となり、日本にもバレエが移入された。代表的な人物としては「アンナ・パヴロア」の功績が大きいだろうと有馬先生はおっしゃる。余談ではあるが、映画評論家の故・淀川長治さんがバレエ好きだったこともあり、メディアで広く述べられたことによっても、日本におけるバレエ文化の興隆には大いに拍車がかけられたようだ。

ただし、ご存知のようにバレエ公演には舞台装置ほか、オーケストラも含めると、予算規模も次第に大きくなるものだ。もしも小規模になってしまうと「面白くない」という結果になる。矛盾と言え矛盾なのだが、「チャイコフスキーの三大バレエを見たければ、子供のバレエ公演へ！」行けば見られるというような現実もある。

有馬先生はバレエには別の意義も加わるのではないかとおっしゃる。それは、そもそもルイ 14 世以来、バレエは「礼儀作法」と共にあった。まずは、お辞儀とともに伝えられるフランス文化が日本へもたらす影響は決して少なくないだろう、とも付け加えられた。

従来、京都日仏協会の集いでは、音楽の演奏など、目の前で繰り広げられることが多い。人間、やはり目の前で見たものに感動するものである。

今回、有馬先生はフランス・バレエに始まる歴史と、その後の経過を語られたのだが、お話だけでなく、秘蔵っ子の生徒さん二人によるバレエの基本的なポジションの数々を見せていただけたのが、とても印象的であった。「決まり手」というような、ポジションのポーズは、いったん静止しなければならず、狭くて小さな舞台での二人の演技はかなり難しいものであろう。そのためにもダンサーの足を痛めないために、リノリウムの敷物を特別に用意されての演技であった。若手ダンサーとバレリーナによる実演、ことに彼らの手足の長さ、その凛とした姿勢には、観客の目が釘付けになったのである。にこやかに笑みを絶やさない若者たちの美しい踊りをじかに目の前で観賞できたことは、それこそバレエがもたらす「至福のひととき」であったと言えるのではないか。

なお、有馬先生はこれまでのご努力とそこにご功績に対して、フランス政府からのレジオン・ドヌール勲章を受賞されました。

F.J.Kyoto 編集委員 鴛淵 記

※京都日仏協会会報「FJKyoto No37」より掲載

有馬えり子さんの了解も得ています。

